

張作霖大元帥と日本

儀我 壮一郎

目 次

- I 暗殺の類型と歴史的系譜
- II 張作霖政権への多様な対応策
- III 張作霖爆殺実行部隊の編成
- IV 張作霖爆殺をめぐる諸問題
- V 張作霖爆殺事件80周年の日本の現状

張作霖（1875—1928年）とその長男張学良（1901年—2001年）は、中国史、日本史、そして日中関係史において、きわめて重要な役割を果たした。

本稿では、主として張作霖爆殺事件（1928・昭和3年6月4日）をめぐる諸問題を検討するが、この事件の歴史的位置づけのために、まず、暗殺の類型と歴史的系譜について予備的に考察した。

張学良と昭和天皇（1901—1989年）は、ともに1901年生まれ、まさに同時代人であり、20世紀の生き証人である。両者は、20歳台の時、よく似ていた（NHK取材班・臼井勝美『張学良の昭和史最後の証言』角川書店、1991・平成3年、37—40ページ）。

昭和天皇は、1989・昭和64年1月に死去する。その翌年1990年6月1日に、張学良は90歳の賀寿を迎え、「台湾神社」の跡地に建てられ、宋美齡が経営する「円山大飯店」で盛大な祝賀会が開かれた。西安事変（1936・昭和11年12月12日開始）以来50年以上の「軟禁的」状況から、

全く解放されたのである。1920年に会談した昭和天皇と張学良の象徴的な奇縁といえるのかもしれない。

その昭和天皇の即位後最大の重要事件が、張作霖爆殺事件であった。ところが、昭和天皇自身、2回の暗殺未遂事件を体験している。これもまた、奇縁であろう。昭和天皇は、摂政時代の虎ノ門事件（1923年12月）の後に、張作霖爆殺事件に対応するのである。

このような奇縁にも留意しつつ、張作霖爆殺の真相について多角的に検討する。最新の状況との関連でいえば、田母神俊雄前航空幕僚長が「日本が侵略国家だったとはぬれぎぬ」と主張し、張作霖爆殺はコミンテルンの仕業かなどと論じてアバグループの「最優秀懸賞論文」とされるような風潮のなかで、着実に真相を明らかにすることが重要と思われるのである。

なお、文中〔 〕はすべて儀我による。

I 暗殺の類型と歴史的系譜

暗殺（assassination）は、殺人一般とは区別され範囲が限定される。

政治的要人を、政治的目的のために、非合法的手段で殺害することが、「暗殺」とされる。語原からいえば、宗教的目的の場合も問題となる。

暗殺は、その主体によって、①権力者側が広義の「政敵」を殺害する場合と、②反権力・反

体制派が、権力者を殺害する場合とに大別される。テロリズム・クーデターとの関係も問題となるが、ここでは省略する。

①には、権力者間の暗殺による場合（カエサルの暗殺—紀元前44年）と反対派リーダーを葬る場合（スターリンによるトロツキー暗殺—1940年、田中義一内閣当時の山本宣治暗殺—1929年）などが含まれる。

②には、帝政ロシア期のナロードニキによるアレクサンドル2世暗殺—1881年などが含まれる。

中国の歴史を見れば、秦の始皇帝（紀元前259—210年）暗殺未遂など多くの例がある。20世紀に入ってから、袁世凱（1859—1916年）の政敵国民党の宋教仁（1913年3月袁により暗殺）、国民党の要人陳其美（フランス租界の山田純三郎宅で1916年5月18日、袁政権の刺客により暗殺。蒋介石が後継者とされた。陳の甥は後に中国四大家族に数えられる陳果夫・陳立夫兄弟）、国民党左派の理論家廖仲凱（1925年、国民党内右派に刺殺された。新中国成立後の中国日本友好協会初代会長廖承志はその子息）などの重要な暗殺事件が注目される。林彪による毛沢東暗殺未遂事件などは、詳論を要する。

日本の近現代史を見れば、井伊直弼（1815—1860年。日米修好通商条約の勅許問題をめぐって桜田門外で暗殺）、坂本竜馬（1835—1867年。1866年薩長同盟を介して討幕派の結集に成功した後、中岡慎太郎とともに京都で暗殺）、明治新政権の内務卿大久保利通（1830—1878年。東京赤坂紀尾井坂で不平士族により暗殺）、板垣退助（1837—1919年。1877年、暗殺未遂）、など多数の事件がある（司馬遼太郎『幕末』新装版、文春文庫、2001年など参照）。

ここでは、1880年公布の刑法に規定され、1907年刑法（第73条、74条）に継承された大逆罪が適用された事件に注目しよう。張作霖爆殺事件

（1928年6月4日）は、次の②と③の間に発生したのである。

①「大逆事件」は、1910年5月、朝鮮併合が強行されつつあり、社会主義者たちがそれに反対している時に発生。第2次桂太郎内閣は、明治天皇暗殺を計画したとして、まず宮下太吉、管野スガを逮捕。社会主義者の陰謀事件と宣伝して、全国で数百名を逮捕。幸徳秋水を首謀者とし、26名を天皇暗殺の大逆罪容疑で起訴。1911年1月18日、大審院で幸徳他24名に死刑判決（うち12名は天皇の恩赦で無期懲役に減刑）、判決後一週間で刑が執行された。4名が未熟な暗殺計画にかかわっただけで、幸徳はじめ多数は、事件との直接関係はなかった（今村力三郎弁護士の各種資料、塩田庄兵衛『幸徳秋水』新日本新書、1995年など参照）。

②「虎ノ門事件」。1923年12月27日、山口県出身の難波大助による摂政裕仁（後の昭和天皇）暗殺未遂事件。難波大助は、「大逆事件」や1923年の関東大震災における朝鮮人虐殺事件などに憤り、暗殺を決意したといわれる。摂政の自動車は虎ノ門の市電停留所にさしかかったとき、仕込杖銃を発射、窓ガラスは破損したが失敗。1924年11月13日、大審院で死刑判決。2日後に執行。享年25歳。山本権兵衛内閣は事件の2日後、引責総辞職。父親（代議士）は辞職。昭和天皇は、このような経験を経て張作霖爆殺事件に対応したことに留意しよう。

③「桜田門事件」。1932年1月8日の昭和天皇暗殺未遂事件。天皇が代々木錬兵場での陸軍始の観兵式の後、宮城（皇居）への帰途、馬車に爆弾が投げつけられたが被害は無かった。爆弾を投げた朝鮮人の土木工・李奉昌（32歳）は、日本で朝鮮人差別を受けたことを憤っての犯行であった。10月10日、処刑された。

犬養毅内閣は、山本権兵衛内閣の先例もあり、ただちに総辞職を決定したが、天皇に慰留され

て留任した。その犬養毅首相が、直後の1932年5月15日の「5.15事件」によって暗殺されるのである。天皇が慰留しなかったならば、とも想像せざるをえない。

さて、暗殺の種類として、国内的暗殺と国際的暗殺とに大別することも、問題の所在を検討するさいに有効であろう。

1. 国内的暗殺事件。上述の歴史的事例は、ほとんどこれに属する。ロシア人トロッキーのメキシコにおける暗殺は、国際的側面をもつが、ソ連対メキシコの対決にいたるような性質のものではない。

2. 国際的暗殺事件。日本に即して検討しよう。いずれも、国家間の対立と深く関連する。

①閔妃暗殺事件。1895・明治28年、朝鮮の李朝26代高宗（李太王）の妃である閔妃（1851—1895年）が、日本公使三浦梧楼指揮下の安達謙蔵ら日本人「壯士」に王宮内で暗殺された事件。閔妃は大元君（高宗の父。1820—1898年）を引退させ、清国に従属する政治姿勢で日本に対抗していた。日清戦争後は、三国干渉を経て親露政策をとったこともあり、暗殺された。安達謙蔵は、後に憲政会・民政党の幹部となり、加藤高明内閣の逋相、浜口・若槻内閣の内相などを務めた。暗殺者優遇の先例ともいえる（角田房子『閔妃暗殺』〈1988年新潮学芸賞受賞〉参照）。

②伊藤博文暗殺事件。長州萩出身の伊藤博文（1841—1909年）は、明治期の最有力な政治家であり、初代統監として日韓併合の主役となるが、1909年、訪露の途中、ハルビン駅頭で朝鮮民族主義者安重根によって銃撃、暗殺された。

日露戦争開始後、日本は、1904年2月の日韓議定書および以後3次にわたる日韓協約によって韓国の主権を掌握、1908年の東洋拓殖、1909年の韓国銀行の設立によって経済的支配体制を固めた。韓国側も抵抗する。愛国啓蒙運動や1907年の第3次日韓協約がもたらした韓国軍隊の解

散に反対した兵士による義兵闘争では、5年間に日本軍と交戦すること2850回に及んだ。伊藤博文暗殺事件を契機に、日本政府は日韓併合を急ぎ、1910年8月22日、寺内正毅統監と李完用首相が「日韓併合ニ関スル条約」に署名し、併合は完了したとされている（安重根の原像を詳論した斉藤充功『伊藤博文を撃った男』中公文庫、1999年、をぜひ参照していただきたい）。

③サラエボ事件と第1次世界大戦（日本の参戦）。

1914年6月28日、オーストリア皇太子夫妻がオーストリア・ハンガリー二重帝国からのボスニア・ヘルツェゴビナの解放と南スラブ人の統一を目指すセルビア人青年によってボスニアで暗殺された。オーストリアは、7月23日、セルビアに最後通牒を発し、28日宣戦布告。これに対してロシアは総動員令で対抗した。その背景には、ドイツ・イタリア・オーストリアの三国同盟とイギリス・フランス・ロシアの三国協商という2大陣営の対立があった。とくに新興国ドイツとイギリスとの関係は緊迫していた。8月末までには、イタリアを除くすべての同盟国と三国協商国が交戦状態に入った。第1次世界大戦である。国際的暗殺事件が、国家間の対立を戦争にまで導く結果となったのであり、日本も日英同盟を大義名分として参戦、ドイツと交戦の結果、「勝利」した。大戦中の1915年1月、日本政府（大隈・板垣内閣）は袁世凱政権に対していわゆる「二十一ヶ条要求」を提出した。その要求は、次の5つに分けられている。

第一号 山東権益。山東省における権益に関して日本がドイツと協定を結んだ場合、中国政府はすべて承認すること。

第二号 南満州・東部内蒙古における日本の優先権。旅順・大連および南満州鉄道の租借期限延長、日本人の居住・営業の自由、不動産取得権、鉱山採掘権を認めること、など。

第三号 漢冶萍公司^{*}の合弁。同公司を将来日中兩國の合弁とすること、その資産および採掘権を保全すること。

第四号 領土不割譲。中国沿岸の港湾・島嶼を他国に譲渡・貸与しないこと。

第五号 いわゆる希望条項。①中国政府に日本人の政治・財政・軍事顧問を雇うこと、②必要な地方の警察を日中合同とするか、警察に日本人を雇うこと、③兵器は日本に供給を仰ぐか、日中合弁の兵器工場をつくること、④華中・華南にも日本の鉄道敷設権を認めること、⑤福建省の運輸施設に対する日本資本の優先権、⑥日本人の布教権、など。

(＊ 湖北・湖南両省にまたがる鉄鋼コンビナートで、漢陽製鉄所、大冶鉄山、萍郷炭鉱から成る。日本にとっては大冶の鉄鋼石が八幡製鉄所の原料として重要な意味をもっていた)。

これらの要求は、日本の既得権益を強化拡張するだけでなく、中央政府をも日本の監視下に置き、中国を日本の保護国にしようとするものであった。

袁世凱は要求の内容をアメリカに洩らし、列強の干渉によって日本に譲歩させようとしたが、列強は第五号については強い反対を示したものの、その他については日本の主張を諒承した(小島晋治・丸山松幸『中国近現代史』岩波新書、1986年、77ページによる)。

ここで注目すべきは、「二十一ヶ条要求」に対して張作霖が「強固なる主戦論を主張し、悲憤慷慨、排日論を鼓吹唱導」していたことである(水野明『東北軍閥政権の研究』国書刊行会、1994・平成6年、160ページ)。

④張作霖爆殺事件。1928・昭和3年6月4日、満州駐在の関東軍高級参謀河本大作大佐が首謀者となり、中華民国安国軍大元帥張作霖を、鉄道爆破により暗殺した事件。既発表の「張作霖爆殺事件の真相」(専修大学『社会科学年報』

第42号、2008年3月)および本稿で詳述。この暗殺事件の基本目的は、「満州事変」に直結し、日独伊三国同盟などを経て第2次世界大戦(1939—45年)への導火線となったのである。

II 張作霖政権への多様な対応策

「1911年辛亥革命後の中国では、革命派と軍閥派の闘争が繰り返されていた。この両派が相争っている間に、張作霖は革命と戦争の隙間から東三省を統合して独自の覇権地盤を樹立したのである。／当時、諸外国、特に日本は常に北京政府を交渉相手とし、これを是認していた。しかし軍閥派に握られた北京政府は、現実には何らの政治的機能を果たさず、中・日間の諸条約及び諸協定の完全実施も思うような進行をみなかった。また、広東革命政府の外交交渉については、対立の関係上、ほとんど関与できず、『諸外国も革命派を観望しながら、実質の外交交渉を避けていた』(ジョルジュ・デュバルビュ『中国近代史』後藤富男・白鳥芳郎共訳、白水社、1955年、73ページ)」(水野明「張作霖のパーソナリティ」『閑花集』2006年3月、270—271ページ)。

日本政府は、早くから、張作霖政権を重視し、対策を練っていた。

1921・大正10年5月、原敬内閣は、張作霖に対する国家方針を閣議で決定した。「帝国が張ヲ援助スルノ主旨ハ、張個人ニ対スルニ非ズシテ……満蒙ニ対スル我ガ特権ノ位置ヲ確實ニスルニ在リ」「張作霖が……中央政界ニ野心ヲ遂グルガ為帝国ノ助力ヲ求ムルニ対シテハ、之ヲ助ケルノ態度ヲ執ラザルコト……」(半藤一利『昭和史探索・1』ちくま文庫、2006年、169ページ)。1927・昭和2年成立の田中義一内閣の張作霖対策も、基本的に共通していた。1928年6月の張作霖の北京から満州への帰還を促進

したのも同じ趣旨である。

張作霖は、芳沢謙吉公使の説得にもかかわらず、満州への帰還を拒否していたが、1928・昭和3年6月初めに帰還を決意し、盛大なパーティーを開催した後、二度とかえらぬ旅路を辿るのである(芳沢謙吉『外交六十年』中公文庫, 1990年, 80—86ページ)。

河本大作大佐主導の張作霖爆殺は成功し、「満洲某重大事件」と呼ばれるようになる。

「満洲某重大事件」に対する池宮彰一郎の批判は、きわめて痛烈である。「史上数ある陰謀の中で、これほど粗策で杜撰な陰謀は珍しい。それは先人の二度の戦捷に奢りに奢った軍人が、軍教育機関から軍隊という閉鎖社会の中で夜郎自大におちいり、一般社会を軽侮蔑視する特権を専横する人種になり果てた結果であった。実に国を誤り、滅亡の淵に陥れたのは、誰彼を問わず彼ら軍人の粗悪な頭脳と人間性に依るものであった、と言っても過言ではない。／彼らも、そして当時の日本人も、誤解している一事がある。／——張作霖は、馬賊あがりの一地方軍閥、私兵を持つ暴力組織の頭目である。世から抹殺しても益あって害はない。／だが、事件当時、日本が承認していた正式政府は北京政府で、南京政府ではない。張作霖は北京政府の大元帥で、一国の元首であった。敗れて関外に退いても、満蒙全域の主権者である。／一国の元首を、他国が恣意に暗殺する。その重大な認識に欠けている。／その錯覚に基づいた粗雑な殺人計画は、本来の目的を果たさなかつたばかりでなく、将来に数多くの禍根を残した」(池宮彰一郎「満洲某重大事件」『義、我を美しく』新潮文庫, 2000・平成12年, 121ページ)。

では、禍根とは何か。

「最も大きな禍根は、天皇の自責と自制である」。昭和天皇の田中義一首相に対する叱責は、内閣総辞職をまねいた。これは行き過ぎではな

いかという自責が、「以後の天皇の言動をきびしく自制させた。そのため、満州事変から始まる十五年間の戦争に、天皇によるブレーキはまったく発動しなかった」。

「それにひきかえ、軍部の専横は、この重大事件のあいまいで軽々な処分によって、一段と増幅された。軍刑法(擅権^{せんけん}ノ罪)はもとより、一般刑法(殺人・列車転覆破壊・爆発物取締罰則)に照らしても、死刑はまぬがれぬ首謀者は、行政処分のみで青天白日の身となった。……」。

「さらに——軍部の国政軽侮に至っては枚挙^{いとうま}に暇がない。……」。

「国際間において、日本が信を失ったことは言うまでもない。……」。

「『張作霖爆殺』は、被害を受けた支那(中国)よりも、加害者の日本にとってまさに重大事件であった。」(池宮彰一郎, 前出, 122—123ページによる)。

陸軍内部の対立という側面から見れば、長州閥の田中義一首相は張作霖の擁護・利用の立場である。長州閥に反抗するグループは2つあった。上原勇作元帥グループ(武藤信義大将, 村岡長太郎中将<関東軍司令官>, 真崎甚三郎中将, 荒木貞夫中将, 秦真次少将<奉天特務機関長> 柳川平助少将, 香椎浩平少将など=張作霖爆殺当時の職による)がそのひとつである。もうひとつは、エリート幕僚中堅層のグループであり、このグループの結成は、1921・大正10年10月のいわゆるバーデンバーデンの密約にはじまる。この密約には、在欧中の陸士16期の同期生の3人の少佐、永田鉄山, 小畑敏四郎, 岡村寧次に、1日遅れで、陸士17期の東条英機少佐が参加した。1923年には、陸士15期の河本大作, 16期の板垣征四郎が加わり、1927年からは定期的な会合が渋谷のフランス料理店二葉亭で開かれ、会の名は「二葉会」とされた。1929年1月には、以上のほか、山岡重厚, 磯谷廉介,

小野弘毅，小笠原数夫，土肥原賢二，黒木親慶，渡久雄，松村正員，工藤義雄，岡部直三郎，中野直三，山下奉文も会員となっている。会員数18名であるが，このうち，山岡重厚，小畑敏四郎，山下奉文らは，上原勇作グループに属していたといわれ，「二葉会」と上原グループは気脈を通じていた（大江志乃夫『張作霖爆殺』中公新書，1989年，32—35ページによる）。

以上の反長州グループの人脈を見れば，2つのことが言えるであろう。

第1は，張作霖爆殺が，長州派の田中義一首相の張作霖利用計画を阻止し，さらには，政治的にも田中首相を窮地に追い込み，ついに田中内閣総辞職という「成果」をもたらしたことになる。反長州グループにとっては，予想以上の「成功」を生んだ結末である。

第2に，河本大作は，反長州グループ（後の皇道派と統制派を含んでいる）にとって「英雄」視され，「河本に対する厳正な処罰」には，反長州グループが強く反発し，「軽微な処置」とその後の河本の優遇の道も開かれるのである。さらに，「二葉会」の最先輩の河本擁護のために，少壮幕僚の組織化も急がれた。「二葉会」の会員は，中堅将校中心の「無名会」（石原莞爾，村上啓作，鈴木貞一，根本博，土橋勇造，武藤章その他が参加），「木曜会」（村上啓作，根本博，深山亀三郎，横山勇その他が参加），さらに東条英機が命名した「一夕会」との連繫を深めている（同上，39—43ページ）。

1929・昭和4年1月12日には，「二葉会」の在京会員全員出席，岡村寧次の日記によれば，「話題の主なるは作霖爆破事件に関し陸軍の前後策ついで河本の救済策なりき」とある（同上，45ページ）。

河本大作は，1929年6月，予備役に編入された。しかし，陸軍の中樞は，河本を「英雄」視し，10月1日には，赤坂三島で盛大な慰労宴を

開くほどであった。岡村日記によれば，出席者は，二宮治重，畑俊六，建川美次，小磯国昭，永田鉄山，梅津美治郎，東条英機，重藤千秋，岡村寧次。「このように陸軍部内に反省の色がまったくなかったのであるから，関東軍の参謀部が河本のしいた路線をそのまま追求していったのは当然であった」（同上，166ページ）。

民政党の「軟弱外交」に対して，政友会田中首相は対中国「積極外交」「強硬外交」とされている。

では，憲政会・民政党外交の中心人物幣原喜重郎の対中国政策はどのようなものであったか。田中路線，河本路線とは基本的に異なっている。

幣原喜重郎（1872—1951）は，日本の代表的な外交官の1人であり，敗戦直後GHQの圧力で総辞職した東久邇宮稔彦内閣について，1945年10月には幣原内閣を組閣したが，約6ヵ月の短命であった。その間，人間天皇宣言の起草，新憲法草案への戦争放棄と非武装の条項の挿入，衆議院議員選挙法の改正（婦人の参政権など）の面で貢献したとされるが，折からの食糧危機などのなかで，翌46年5月，首相の座を吉田茂（1878—1967）にゆずった。

「幣原外交」は，政友会田中義一首相兼外相の対中国「積極外交」と対比して論議される場合が多いが，馬場伸也によれば，次のような特徴をもっている。

①内政不干涉，②徹底した合理主義と経済的利益を優先させる実利主義（一名「経済外交」ともいわれる），③協調主義，④平和主義，⑤視野の広いグローバルな外交（国際主義），それらをつらぬく自由主義と民主的精神などとされる。1924・大正13年6月，護憲3派連立の加藤高明内閣の外相に就任，その後，第1次若槻礼次郎内閣（1926年1月—27年4月），浜口雄幸内閣（29年7月—31年4月），第2次若槻礼次郎内閣（31年4月—同年12月）の外相として

活躍した。

外務省外交史料館特別展示「幣原外交の時代」の「開催にあたって」は、次のように評価し、時期区分している。

第一次大戦後の「幣原外交」は、「ワシントン会議の精神」を基調とし、東アジアの安定と経済外交を多角的に追求するなど、日本外交史上に特筆すべき一時代を築いた。

ワシントン会議全権時代（1921年9月—22年2月）＝新時代の外交機軸の探究。

第一次外相時代（1924年6月—27年4月）＝
①ワシントン体制の擁護者として、②中国安定化の模索、③ワシントン体制の基盤拡充（1925年1月、ソ連と基本条約を締結し国交を回復）、④貿易の多角化を目指して（新販路の開拓）。

〔この第一次外相時代の後、田中義一内閣が成立。1928年6月、張作霖爆殺事件発生〕。

第二次外相時代（1929年7月—31年12月）＝協調と強硬の狭間（1930年1月のロンドン海軍軍縮条約の締結に際し、「統帥権干犯」を問われながらも浜口首相とともに、条約批准に尽力）、幣原外交終焉の時（欧米の強硬な対中国政策に対して、幣原は中国の関税自主権を認め、中国の呼称を「支那」から「中華民国」に改めるなど、中国側の要望に理解を示した。しかし、1931年9月の「満州事変」勃発後、幣原外交は批判を受け、若槻内閣総辞職とともに外相の座を去った）。

敗戦後、幣原内閣総辞職の後、幣原は第1次吉田内閣の国務相となり、1949年には衆議院議長に就任したが、2年後の51年3月、心筋梗塞で急逝。

「幣原外交」は、軍部、政友会、枢密院、右翼などから「軟弱外交」「英米一辺側外交」などと批判されたが、1925年の中国の「5・30事件」のさいに、イギリスからの共同出兵の提案を拒否するなどの「自主外交」の側面も注目に

値する。

中華民国、中華人民共和国を「中国」と呼称することには、問題は無い。しかし、かつて、中国を「支那」と呼称したことには、重大な抵抗があり、外交問題となっていた。浜口内閣（外相は幣原喜重郎）は、次のように決定した。

「日本政府は当時、条約や国書を除いて中国を『支那』と呼称するとの閣議決定（1913年6月）に基づき、中国に対する呼称として通例、『支那』を使用していました。しかし、中国側は侮蔑的なニュアンスの強い『支那』との呼称を好まず、『中華民国』を用いるよう求める意見が強まっていました。たとえば、1930年（昭和5年）5月、国民政府文書局長の楊熙績は、日本が関税協定の条文中に『支那』を使用した事を批判し、『今後日本側カ重ネテスノ如キ無礼ノ字句ヲ使用スルトキハ我方ハ之ヲ返附スルト共ニ厳シク詰責シ以テ国家ヲ辱シメサルコトヲスヘシ』と論じていました。こうした中国官民の感情に配慮して、1930年（昭和5年）10月、浜口内閣は常則として『中華民国』との呼称を用いる旨を決定しました」（外務省外交史料館特別展示、「幣原外交の時代」2006・平成18年8月—12月の展示資料16、17による）。

Ⅲ 張作霖爆殺の実行部隊の編成

河本大作大佐は、次のように河本を含め6人の実行部隊を編成した。

① 川越守二大尉

1928年2月初旬、河本は、信頼し切っている参謀副官川越守二大尉に胸中を打ち明けた。河本の言をかりると、「第一に私心、即ち個人的な名利欲得があってはならぬ。第二に、宮物、即ち軍の兵器弾薬、及び軍隊兵員を使ってはならぬ。第三に同志は最少人数で秘密は厳守しなければならぬ。」この三カ条を基本に話したと

ころ、川越大尉は欣然として賛成してくれた。

② 管野茂大尉

火薬を自分たちで集めるための適材として、川越が推薦したのが、参謀部付参謀心得で、当時旅順工科大学の火薬学講師を兼務していた管野茂大尉であり、管野も盟約を誓った。管野は、川越の顔なじみの日本人馬賊の頭目に依頼して、チチハル以西の東支鉄道の鉄橋爆破で、新火薬を実験することに成功した。「東支鉄道は日本とは関係ない鉄道で、北満一帯は張作霖配下の呉俊陞軍が支配していたので、この実験は威力の効果をテストできたのみでなく、呉俊陞が張に対して異心があるのではないかという副次効果まで挙げ、大成功だった」（根津司郎、『昭和天皇は知らなかった』早稲田出版、1991年、60—61ページ）。

③ 神田泰之助工兵中尉

装填・爆破の専門家として川越が推薦したのが、朝鮮軍竜山工兵大隊の神田泰之助工兵中尉で、神田も「男冥利」と盟約の同志となった。

5月20日、河本は、「川越、管野に日時は未定ながら決行を打ち明けた。神田中尉への連絡、爆破地点の最終的決定、東北軍の満州帰還の状況、特に作霖大元帥の行動の内偵を即刻開始するよう指示した。同時に、撫順、遼陽の駐屯部隊から、情報蒐集教育を名目に、中尉、少尉を十数名召致し、二名一組として京奉線沿線主要地に派遣した」（同上、63ページ）。

④ 東宮鉄男大尉

5月26日には、関東軍の域外出動の奉勅命会が下らないことが明らかになった。その日、内定していた爆破地点の調査を行っていた神田中尉が、同地の警備隊長東宮鉄男大尉に見咎められた。

東宮は、「竜山工兵大隊の将校が、関東軍管轄地籍をウロツくとは不審なことだ。何か企んでいるな。関東軍司令部を通じて朝鮮軍に連絡

するぞ」と物凄い見幕で神田を脅かした。神田は、やむをえず「河本高級参謀の指示」と白状してしまった。同夜、東宮は河本のところに怒鳴り込んできた。会談の後、同志に加えることになった。爆破地点の警備隊長であるから、予想外の好都合だった。

⑤ 竹下義晴中佐

5月27日、村岡軍司令官と竹下中佐が、司令官室で会談していた。その直後、河本が竹下をよび止めて問いただしたところ、村岡司令官の特命で、北京で張作霖を暗殺すると答えた。そこで河本は、「各国の外交団もいる北京での刃傷沙汰はやめろ」といって自分の計画を説明し、竹下は6人目の同志となった（同上、65—66ページ）。

竹下中佐は、北京で張作霖の動静を確認する触覚的存在、河本と川越は大脳中樞的存在、皇姑屯での爆破実行部隊が、東宮、管野、神田という分担となる（同上、83ページ）。

6月4日午前5時23分、爆破は成功した。

「日本人では作霖の政事顧問だった町野武馬元大佐、軍事顧問だった嵯峨一弘〔儀我誠也〕少佐らが助かったとの情報が入った。その直後、軍服がボロボロになり硝煙で真黒な顔になった嵯峨〔儀我〕少佐が参謀部に現れた。／「何でオレをこんな目に合わせねばならぬのか。関東軍はどうなってるんだ」とあたかも事件を関東軍が仕組んでいたかのように、物凄い剣幕で嵯峨〔儀我〕少佐が怒鳴った。／「関東軍はこの件に一切関与していない」との弁明に努めたが、河本としては心の中で『すまぬ、すまぬ』と繰り返していた。それでも、張大元帥は無事だったかと探りを入れてみたが、嵯峨〔儀我〕少佐から確答は得られなかった」（同上、92ページ）。

「憲兵司令部は『人身御供とされた〔中国人〕浮浪者三名の斡旋に一役買ったと思われる大石橋居住の石炭商・伊藤謙二郎及び自称特務

機関囑託・安達隆成』の二人の身辺調査を始めた。そして二人と関東軍との関係を追求しようだった。さらにこの二人との関係を嵯峨〔儀我〕少佐からも追求されるに至って、河本は愕然とした」（同上、95ページ）。

その後の、関東軍と軍事顧問との関係は不詳であり、今後検討したい。

また、河本大佐の事件後の生涯は派手に満ちているが、後日にゆずるとして、最後に、河本大佐の墓について、保坂正康の記述を紹介してしめくりとしたい。

河本大作の墓は、東京・府中の意外なところにある。長文にわたるが、引用する。

五月（平成二年＝一九〇〇年〔二〇〇〇年であろう〕）の午後の陽射しが強い。参詣者の一人もいない霊園のなかにいくつも並ぶ墓石の影が伸びている。

東京・府中の住宅街にある^{せいしやうざん}聖将山東郷寺。もともとは海軍の元帥・東郷平八郎の別邸であった。一万坪という敷地の、その一角に霊園がある。旧軍人の慰霊、祭祀を目的に昭和三十年代初めに開放されたのだという。たしかに墓石には旧軍人や兵士の名が刻まれている。

霊園の中央奥に樹木にさえぎられて陽の届かぬ^{こうもと}帯がある。「河本大作之墓」は、その一帯のなかにあった。敗戦時の軍令部総長・豊田副^{そえ}武や陸軍中将だった斎藤弥平太と並んで河本の墓地がある。その墓地は他の者よりやや広いものの、中央に墓石が建つだけの簡素なものであった。訪問者は決して多くないようで、豊田の墓地には花が供えてあり、樹木も手入れの行きとどき、よく茂っているのに、河本の墓地には墓石の脇に私の膝元までの短い一本の、まだ葉のついていない木が植わっているだけであった。孤影という語がすぐに浮かぶ。

墓石には「護国院釋大道 俗名河本大作 行年七十二歳 昭和二十八年八月二十五日 北支

山西省太原収容所に於て戦犯として収容中病死」と刻んである。その隣には「マリア・アンナ 妻河本ひさ 昭和四十九年三月廿三日没行年八十九歳」とあった。河本の妻はクリスチャンだった。戦後になって高級軍人の妻や息子、娘たちが数多くキリスト教に関心を寄せたが、河本の妻もまたそのようであった」（保坂正康『昭和陸軍の研究』上、朝日文庫、2006年、87—88ページ）。ちなみに、河本大作の三女清もカトリックの修道女となっている。2008年5月筆者（儀我）は聖心女子大学内で、お会いすることができた。

IV 張作霖爆殺をめぐる諸問題

森島守人『陰謀・暗殺・軍刀』（岩波新書、1960年）は、名著として定評がある。次の重要な一節を手がかりに、いくつかの問題点を検討しよう。

1928年6月4日「爆発列車に張作霖と同車していた顧問、嵯峨〔正しくは儀我一以下同じ〕誠也少佐（華北事変発生後少将として冀東防共自治政府顧問となり、唐山に在勤中病死した）が負傷したままで飛びおり、又町野顧問が天津で下車したところから、関東軍全体の仕業だろうとの憶測もあったが、嵯峨が全然関知していなかったことは事実で、爆破関係者は関東軍中の二、三名に止まっていた。当時張の現役顧問は土肥原賢二大佐と嵯峨の二人であったが、土肥原は陰性的な性格のため、とかく敬遠され勝ちだったのに反し、嵯峨は明朗な人となりのため、東三省官場内の信頼を一身に集めていた。しかし中国側の信頼が厚かっただけに関東軍参謀間の評判が悪かったことは事実で、列車の爆破も国家の大事の前には、嵯峨一人位犠牲にしても已むを得ないとて、決行されたのであった。私は在満当時から嵯峨と昵懇にしていたが、昭

和十二年華北事変発生後唐山で会見した折り、その後軍部の気受けはどうかと尋ねたところ、この頃ようやくお叱りも疑惑もとけたらしいと苦笑していた」(23ページ)。

①儀我誠也の()内の略歴は不正確であるが、ここでは訂正しない。

②町野武馬張作霖顧問が天津で下車したことは事実である。その際、爆破計画を知っていたか否かは、町野顧問自身も明らかにしていない。したがって、河本大佐の陰謀に加担していたのではないかとの疑問さえつきまわっている。次は、下車の「理由」である。

「町野の評伝ともいべき『会津士魂風雲録』という私家版の書が、門弟によってひっそりと刊行されている(昭和36=1961年3月)。この書は、天津下車について次のように説明する。北京出発の前日に山東督軍の張宗昌が張作霖のもとにやってきて『なぜ北京を引き上げるのか。自分ひとりでも蒋介石軍と戦う』と詰めよった。張作霖は『それではやってみるがいい。町野さんも同行してくれ』というので天津で下車して、張宗昌の用意した天津の宿に入っとなっている」(阪正康『昭和陸軍の研究』(上、朝日文庫、2006年、106ページ)。町野顧問自身も、談話の中で同じ趣旨を述べているが、爆破計画との関係については語っていない。

町野が知っていたか否かを確かめるためには、町野と関東軍齊藤恒参謀長との親密な関係が注目される。齊藤参謀長は「加担」とまでは行かなくても、知っていた。町野も齊藤からきいていたのではなかろうか。

町野は会津の出身である。長州閥と相容れないことは自明であり、長州派の長老田中義一首相に対する感情も想像に難くない。しかし、田中首相は張作霖温存策である。張作霖と親密な町野としては、河本流の張作霖抹殺論に同調することはできない。

爆破計画を知りながらの途中下車は、以上のような状況のもとで、望ましい選択肢であったと思われる。1914年から張作霖の軍事顧問であった町野が現役を退いた事情も、1920年の安直戦争をめぐる重要な情報を参謀本部に伝え損ねた失敗という理由にとどまらず、会津出身という要因を併せて検討する必要がある。町野と金沢出身の齊藤恒は陸士10期の同期生であり、反長州で一致する側面が注目される。

③「国家の大事の前には、嗟峨〔儀我〕一人位犠牲にしても已むを得ないとて、決行されたのであった」とするのは、首謀者河本大佐の心情を推測したものであろう。

河本大佐の次のような状況認識と軍事顧問に対する反感も、考慮に加える必要がある。

1926・大正15年3月、河本大作中佐は、小倉から関東軍高級参謀に転出、大佐となった。以下、河本大佐の談話記録である。

「そこで、久しぶりに満州に来てみると、いまさらのごとく一驚した。

張作霖が威を張ると同時に、一方、日支二十一カ条問題をめぐって、排日は到る処に行われ、全満に蔓はびこっている。日本人の居住、商租権などの既得権すら有名無実きびこに等しい。在満邦人二十万の生命、財産は危殆きんたいに瀕している。満鉄に対しては、幾多の競争線を計画してこれを圧迫せんとする。日清、日露の役で将兵の血で購われた満州が、今や奉天軍閥の許に一切を蹂躪みじされんとしているのがあった。

しかるに、その張作霖の周囲に、軍事顧問の名で、取り巻いて恬然てんぜんとしている者に、松井七夫中將を始め、町野武馬中佐などがあって、在満同胞二十万が、日に日に蝕まれていくのを冷然と眺めているばかりか、『みんな、日本人が悪いのだ』とささ放言して顧みない。そして唯、張作霖の意を迎えるにもっぱらである。

自分は、まったく呆然とした。支那の各地を

遍歴してかなり排日の空気の濃厚な地方も歩いたが、それにしても、満州ほどのことはない。満人は、日本人と見ると、見縊^{みくび}り蔑んで、北支辺りの支那人の日本人に対する態度の方が遥かに厚い。まさに顛倒である。日露戦役直後の満人の態度とまるで変わっている。」(半藤一利『昭和史探索・1』ちくま文庫、2006年、174—175ページ)。このような認識にもとづいて、河本大佐は張作霖爆殺を計画し、実行する。

ちなみに、佐々木到一北京公使館付武官補佐官は、「予の献策に基づいて河本大佐が画策し……」としている(同上、192ページ)。

④儀我誠也少佐に対する評価の諸側面。

河本大佐はじめ爆殺支持者にとっても、日本陸軍全体にとっても、儀我少佐が列車に同乗していたことは、日本軍の犯行ではないとするアリバイの価値があった。さらに、儀我少佐は、「南方便衣隊の犯行」という趣旨の談話を発表し、日本側犯行の否定に努めている。功績顕著と評価されても当然であろう。

しかし、その晩年、森島守人の質問に対して、「この頃ようやくお叱りも疑惑も解けたらしいと苦笑していた」のはなぜか。

張作霖の死後、儀我少佐は、張学良の軍事顧問となり、信頼されていた。しかるに、張学良は、日本政府の意に反して、1928年12月29日には「易幟」によって南京政府に合流し、国民党による全国統一を実現する。張学良と最も密接な関係にあった儀我少佐が「易幟」などの張学良の反日的な動きを阻止あるいは延期することに失敗したと減点評価されれば、「お叱りも疑惑も」有ったのであろう。

張作霖生死の情報の未確認問題もある。

1928・昭和3年6月22日付の『東京朝日新聞』は、奉天連合21日発として次のように報じている。

「一代の風雲児張作霖氏の死は、遭難以来今

日まで十八日間謎のうちに包まれ、今曉死去したもとして発表されたが、事実は既電の如く遭難当日の四日午前十時死亡したこと明白で、すなわち、張氏が爆音を耳にして現場に駆けつけた斉恩銘および同乗していた儀我顧問らに助けられて大混乱中を大帥府に運ばれたときは午前六時十分で、出血が甚しかったのと、自動車内の四十分間何らの応急措置を施し得なかったため、意識は全く不明瞭に陥っていた。……」

(松本清張「満州某重大事件」『昭和史発掘3』文春文庫、1978年8月、8ページによる)。

張作霖の死去を、張学良の帰奉と残務処理後まで公表せず、日本側に死去を確認させなかったことには、大きな政治的効果があった。事件を契機とする「満州の軍事的制圧」を目的とした河本大作大佐その他の攻撃計画は不発に終り、「張作霖個人の殺害」という「小さな成功」ととどまることになったのである。

ところで、上記の報道中、「……斉恩銘および同乗していた儀我顧問らに助けられて大混乱中を大帥府に運ばれた……」とあるが、儀我顧問は、大帥府まで同行したのではない。同行であれば、張作霖の死去まで看取っていたかもしれない。日本側が、早々に死去を確認していれば、各種の対応は、異なった展開であったとも思われる。

また、荒木五郎〔中国名：黄慕〕も張作霖死去の現場には居合わせず、荒木からの日本側への情報伝達も無かったことも注目を要する。張作霖の死は、徹底的に秘匿されていたのである。

V 張作霖爆殺事件80周年の

日本の現状

2008年は、張作霖爆殺事件(1928・昭和3年6月4日)の80周年に当たる。敗戦前の日本では、「満州某重大事件」と称して、真相は蔽い

隠されたままであった。「大まかにいって、政府や宮中が真相をつかむまでを張作霖爆殺事件といい、真相をつかんでからは満州某重大事件と呼んだようだ」（保阪正康『昭和陸軍の研究』上、朝日文庫、2006年、91ページ）。戦後も、田母神前空幕長などの事実をあいまいにする動きがある。真相の解明がぜひ必要である。

そこで、2008年6月1日（日）11時から学士会館（神田錦町）で開催された「張作霖爆死80周年記念集会」では、参加者一同、事件の真相の本格的解明を目指した。

主催は、現代史を考える会と同集会実行委員会。後援は、21世紀国際交流会、日本中国友好協会、海外音楽研究会、専修大学社会科学研究所、久保医療文化研究所。

司会は壺岐一郎氏（日本記者クラブ会員）。開会挨拶、関岡渉氏（現代史を考える会代表）の後、次の3題の講演。

- ①「張父子政権——その積極的な足跡を追って——」 三田陽（東京工科大学名誉教授・工学博士）。
- ②「張作霖爆殺事件の真相」 儀我壮一郎（大阪市立大学名誉教授・商学博士）。
- ③「中華民国史における張作霖・張学良」 渋谷由里（富山大学准教授・文学博士）

①の三田講演は、「満州」の地で支配力・影響力をもった清朝から中華人民共和国にいたる9本の「国旗」と、5つの敗北者—満州族（清朝）、ロシア帝国、張父子政権、大日本帝国、中国国民党—の足跡と張父子政権の積極面に注目する内容であった。「敗者の歴史的役割の検討」という斬新な視角である。

②の儀我講演の要旨。1914年6月28日のセルビアの青年によるオーストリア皇太子夫妻暗殺が、第1次世界大戦の口火を切った。張作霖爆殺は、1931年9月の「満州事変」からの日中戦争を含めて第2次世界大戦（1939—45）の火蓋

を切った。直接の首謀者は、関東軍高級参謀河本大作大佐、実行の主役は東宮鉄男大尉であるが、その支持者は陸軍内部にとどまらなかった。

張作霖政権温存派の田中義一政友会内閣の総辞職と「5・15事件」など軍部の相次ぐテロ・クーデターによる「二大政党制」・政党政治の終焉にいたる経緯なども検討された。

③の渋谷講演は、孫文（1866—1925年）と蒋介石（1887—1975年）を代表とする南から北への革命と、張作霖政権を含む諸軍事政権の北から南への中央集権的支配力強化の動きを対比しつつ、孫文・蒋介石と張父子政権との関係、張政権下の財政・経済状態、中華民国史にとっての張作霖爆殺事件の意味を考察した。考察のさいに、日中関係の他、米・欧・ソ連などの動向にも注目する必要があると強調された。

次はシンポジウムで、パネラーは4人。

- ①桑田富三子（大連生まれ。河本大作大佐の孫。日本聖心同窓会JASH元会長、平和と寛容の国際絵本展「ハローディアエネミー実行委員長」）は、上述の3題の講演についての短い感想の後、家庭内の祖父としての河本大佐の印象、祖父の祖母への結婚申込みの言葉、大連生活の紹介などから、敗戦後の山東省での日本兵2600人の中国共産軍との戦闘に関する河本大佐の役割（池谷薫『蟻の兵隊』新潮社、2007年参照）にいたるまでを報告。
- ②三田陽（大連生まれ。著書『満州の落陽』など）は、講演を補足し満州での敗戦前後の経験についても報告。
- ③儀我壮一郎（張作霖爆死のさい同じ車輦に同乗していた張作霖の軍事顧問儀我誠也少佐〈当時〉の長男。共著『中国の国民生活』『中国革命史』など）は、講演の補足。
- ④渋谷由里（著書『馬賊で見る「満洲」』『「漢奸」と英雄の満洲』）も主として講演のまと

めと補足。

その後、活発多彩な質疑討論が重ねられた。続いて、佐藤光政氏（二期会）、小滝晴子氏（海外音楽研究会）の満州関連の歌曲の歌唱。

次に、山形放送製作（1987年日本民間放送連盟賞、最優秀作品賞受賞）の「セピア色の証言～張作霖爆殺事件の秘匿写真～」のDVD上映、という充実したプログラムであった。

参加者は、予想を大きく上回る150名以上。

最後に懇親会で締めくくった。

爆殺事件関係者と主催者の平和の願い

6月1日には、田中義一首相の孫田中素夫氏、河本大作大佐の孫桑田富三子氏、東宮鉄男大尉の縁故者東宮哲哉氏、菊池武夫張作霖軍事顧問の孫菊池武則氏、儀我誠也張作霖軍事顧問の長男儀俄壯一郎、また伊藤博文の孫の夫人伊藤瑛位子氏、歴史文学の永井路子氏その他多数の有識者と報道関係者が参加した。

80年の歳月を経て、爆殺事件の関係者の子孫が、当時の立場を超えて一堂に会し、真相の解明に努めたのである。

張作霖爆殺事件の後、1929年4月には労農党代議士山本宣治が右翼により暗殺された。田中義一内閣の次の民政党内閣の浜口雄幸首相は、1930年右翼に狙撃され、翌年死去。

1931年9月18日「満州事変」開始。

前蔵相の井上準之助は、1932年2月、三井合名理事長団琢磨は翌3月、血盟団員によって暗殺された。

政友会内閣の犬養毅首相は、1932年の「5・15事件」で暗殺され、政党内閣の終焉となった。

1936年には、陸軍の皇道派主体の「2・26事件」によって、斉藤実、高橋是清元首相他が殺害された。岡田啓介首相は人違いで難を免れ、首謀者は死刑となったが、この後、軍部の政治支配はさらに強化。1937年、日中戦争本格化。

テロと戦争の口火を切った張作霖爆殺事件の関係者の子孫と主催者が、80年後の6月に、一致して「このような事件の再現を決して許さず、平和を守りぬこう」と強く訴えた。このことが、この集会の最重要な意義であった。

なお、『朝日新聞』2008年6月15日（日）の全一面の特集「張作霖爆殺事件」（写真で見る戦争—永井靖二記者）は、この集会と深く関連する内容であり、参照していただきたい。

張作霖爆殺事件は、張作霖の殺害という目的からは「小さな成功」であった。しかし、大目的としていた満州の早期軍事占領を果たし得ず、逆に、張作霖の後継者張学良が「易幟」によって国民党の南京政府に合流して全中国が統一するという、日本政府などの意に反する結果を招いた。実行者の立場からは、大局的に見て「大きな失敗」である。そして、1931・昭和6年の「満州事変」は、張作霖爆殺の失敗から多くを学びつつ、より「積極的」な満蒙支配を目指す軍事行動であった。その「成功」は、敗戦への第一歩となるのである。

〔追記〕 田母神前空幕長は、張作霖爆殺を「日本側がやったという確かな歴史的根拠はない」（中西輝政京都大学教授）とする見解に依拠している。中西説は、張作霖爆殺は、「ソ連・コミンテルンによるものだ等々の戦争の原因論に関する新事実に関しては、史料的に当たり直」す必要があるとして、真相をあいまいにしている（『諸君』2006年6月号29ページ以下）。ユン・チアンの『マオ』（講談社）などのソ連・コミンテルン犯人説とその論拠がまったく不確実なことはあまりにも明白である。逆に河本大作大佐の「手記」があやしい（瀧沢一郎氏）などとする幼稚な議論（同上、30ページ）は、伊藤隆東京大学名誉教授によって実証的に一蹴されている（同上、32ページ）。

